

M氏ノ運転シタ風景ノ記憶②

晩秋の汽笛は、遠くまで届くような気がする。

かすれたような物悲しい音なのに、芯の通った信頼できる音だ。

駅から実家は、かなり距離があったが、時折聞こえてきていた。稲刈りが済んで田んぼが土になり、収穫後の充実感と少しの寂しさが漂っているせいだろうか。

汽笛が気になる頃はもう彩りの強いものは柿ぐらいで、あとはモノトーンに近くなっている。

ところで、干し柿の作り方をご存知だろうか。

そう、渋柿をむいて、ひもに吊るすだけ、たったそれだけだ。冬になれば、砂糖よりも甘い糖分が顔を出す。とても甘い。僕はそんな甘さが苦手だったけど・・・。

そんなに簡単だから、東北では、近所のどの家にも干し柿がたくさん吊るしてあった。

そして、モノトーンの風景の中、サザンカが咲き始める頃まで、風景の中の彩りとして主役級の目立ち方であった。

特に吊るし始めたばかりの柿は、半透明のオレンジ色が不思議なほど無垢で、美しい。

夜になって光があたると、まるで宇宙にある木星のようだ。存在感のある神々しささえ、感じさせる。

そこに汽笛が聞こえたら、もうたまらない。

今なら、泣いてしまうかもしれない。